川の子ども新聞

2002 冬号

上毛新聞

ぼくは利根川の水の精「ポトム」。利根川の源流でポトンと落ちた1滴の水から生まれたんだ。ぼくといっしょに、川と水のことを学んでみよう。

●もくじ

P1　川にまつわる話
P2-3　川に住む生きものたちの暮らし
P4-5　ぐんま・川と水のすごろく
P6-7　暮らしと水
P8　ポトムの楽校

川の声、聞こえるかな？

冬休み。でも、川は眠らない。
上流も下流も、水は生きている。
川のこと、水のこと、いのちのこと。
もっと知って、学んでみよう。

吹割の滝

川にまつわる話

――板橋　春夫

◆吹割の滝と椀貸し伝説

利根川上流にある利根郡利根村追貝の吹割の滝は、雪解けのころ、たくさんの水がゴーッと音を立てて流れるダイナミックな滝です。

この滝は、昔から竜宮へ通じているといわれていました。というのは、昔の結婚式は自宅で行い、たくさんの茶碗や皿などの食器が必要でした。しかし、そのような食器はどこの家にもあるわけではなかったので、必要なとき紙に書いて頼むと必要な数だけ出てきたそうです。竜宮から届くので村の人は食器の心配がなかったのです。

あるとき、数を間違えて返さなかったことがありました。すると何日間も食器は岩の上に置かれたままで、ついに竜宮へは戻らず、それ以降借りることができなくなったということです。

◆川の名前あれこれ

利根川の「利根」にはどのような意味があるのでしょうか。利根川の源流は、利根郡水上町の大水上山にあり、利根川の水上の意味です。このあたりはけわしい山々―「尖嶺」が多く、そこから流れ出す川なので利根川といいます。

また、群馬郡倉渕村の鼻曲山には、烏石と呼ばれる黒い岩があり、ここから流れる川なので烏川の名があります。神流川は、多野郡上野村、中里村、万場町を流れますが、この地域はかつて焼き畑（古くはカンノと言った）の盛んな地帯でした。神流川はカンノ地帯を流れる川という意味です。

利根川上流の利根郡利根村追貝の吹割の滝は、雪解けのころ、たくさんの水がゴーッと音を立てて流れるダイナミックな滝です。

この滝は、昔から竜宮へ通じているといわれていました。というのは、昔の結婚式は自宅で行い、たくさんの茶碗や皿などの食器が必要でした。しかし、そのような食器はどこの家にもあるわけではなかったので、必要なとき紙に書いて頼むと必要な数だけ出てきたそうです。竜宮から届くので村の人は食器の心配がなかったのです。

あるとき、数を間違えて返さなかったことがありました。すると何日間も食器は岩の上に置かれたままで、ついに竜宮へは戻らず、それ以降借りることができなくなったということです。

◆川の名前あれこれ

利根川の「利根」にはどのような意味があるのでしょうか。利根川の源流は、利根郡水上町の大水上山にあり、利根川の水上の意味です。このあたりはけわしい山々―「尖嶺」が多く、そこから流れ出す川なので利根川といいます。

また、群馬郡倉渕村の鼻曲山には、烏石と呼ばれる黒い岩があり、ここから流れる川なので烏川の名があります。神流川は、多野郡上野村、中里村、万場町を流れますが、この地域はかつて焼き畑（古くはカンノと言った）の盛んな地帯でした。神流川はカンノ地帯を流れる川という意味です。

吾妻川は、吾妻郡を西から東に貫き、渋川市で利根川に合流します。この川は吾妻郡から流れ出す川という意味です。同じく碓氷川は碓氷郡から流れ出す川です。鏑川の「かぶら」は、甘楽郡がなまったもので、やはり甘楽郡から流れる川という意味です。

川の名前の多くは上流に発するといい、いままで見たように「○○地方」から流れ出す川というのが圧倒的に多いようです。

◆天狗がつくった用水

天狗岩堰は、慶長九年（一六〇四）に完成した用水です。北群馬郡吉岡町大久保付近の利根川から取水し、井野川に注ぐ約二〇キロの用水で、前橋市・高崎市・玉村町の水田約一千ヘクタールをうるおします。

秋元長朝は、徳川家康より総社一万石を与えられましたが、領内は丘陵地で水田が少なく、利根川の水を引いて水田を増やす計画をたてました。しかし丘陵地のため、たいへんな工事でした。

大石に突き当たり、掘り出せず困っていると、一人の老人がやって来て助けてくれました。おかげで巨岩を割ることができ、ようやく利根川の水が用水堰を流れるようになったのです。工事が終わるとその老人はいつのまにか消えていました。秋元氏は、天狗が老人に姿を変えて手伝ってくれたのだと思い、以来この用水を「天狗岩堰」と呼ぶようになりました。

天狗岩堰の恩恵を受ける農民の子孫が、秋元氏に感謝をこめて、力田遺愛碑を秋元氏の菩提寺である光厳寺（前橋市総社町）境内に建てました。一七〇年後の安永五年（一七七七）のことでした。

〔参考文献〕・『群馬県史資料編八』（群馬県史編さん委員会、一九八〇年、一六百村のむかし話』（大百村教育委員会、一九九七年、『伊勢崎市史民俗編』（伊勢崎市、一九八八年）

板橋春夫（いたばし・はるお）
一九五四年生まれ。群馬県史資料編専門員。『群馬の暮らし』（後時記）、『上毛新聞社、一九八九年）、『群馬と赤城』（長谷文化を読む―』（後乎堂、一九九五年）、『祭礼行事群馬県』（おうふう、一九九八年）など。